

# 劇づくりの実際

## — 劇「さるかにがっせん」(養護学級中学年組) —

松田信夫

### 1 題材「さるかにがっせん」の決定

劇の題材を選択する際の観点として183ページで述べたので、ここでの重複は避けたいが、日本昔話「さるかにがっせん」はその観点の①から③までの内容を満たしている。「さるかにがっせん」はストーリーの展開が比較的単純でつかみやすく、しかも登場人物の役割もはっきりしているため、本学級の児童の実態に合っていると考えた。そして必要に応じてそのあら筋や内容に若干の変更を加えることで、児童による表現豊かな劇化が可能になると判断した。また、この昔話は一般によく知られている話であり、演じる側と観る側との一体感が形成されやすいという長所もあると考え、題材を「さるかにがっせん」に決定した。

### 2 指導にあたって

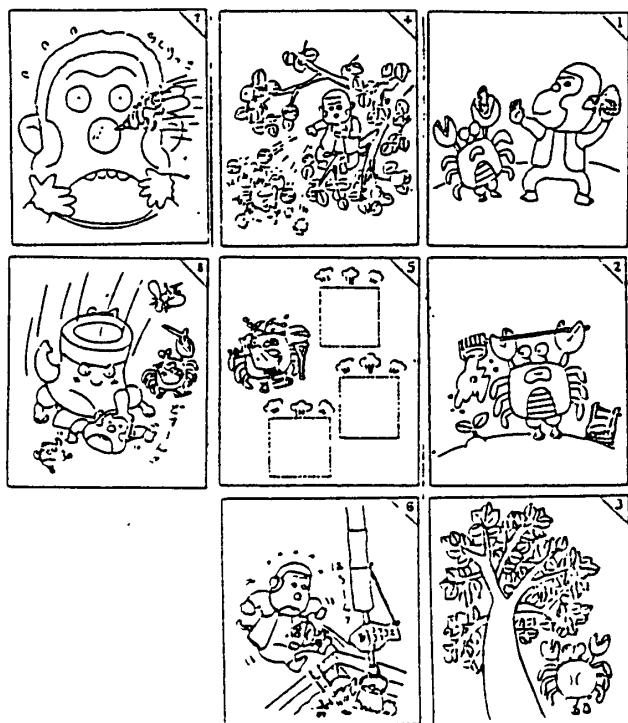
本学級の児童は絵本が大好きである。気に入った絵本があると図書室から家にもちかえり、親に読んでもらったり、あるいは読んできかせてあげたりすることもある。こうした児童の興味・関心を生かすため、絵本づくりを国語の学習の中に位置づけてみることにした。

#### (1) 絵本づくりについて

劇づくりの構造(183ページ参照)の中の「物語の学習」にこの絵本づくりを位置づけてみた。物語の要素(登場人物、あら筋等)の理解をよりよく促進させることを目的とした。

#### (2) 「物語の学習」で使用する絵と指導計画

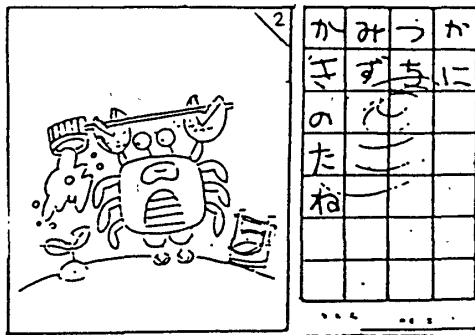
絵本づくりの学習で使用する絵は子どもに理解されやすいものである必要がある。このたび用意した絵は、NHKサービスセンター紙芝居「さるかにがっせん」(学研)を参考にした。物語のあら筋のポイントとして、下図のように八つの場面を選んで絵にした。これらの絵にもとづき、



場面	場面の内容	計画(抜粋六場面)
第八場面	ウスがサルの上にとびおるる	第六時
第七場面	ハチがサルをちくりとさす	第五時
第六場面	クリがはじけてサルがやけどをする	第四時
第五場面	ハチ、クリ、ウスが怒る	第三時
第四場面	サルが実をなげ、カニがケガをする	第二時
第三場面	カキの種は木になり、実をつける	第一時
第二場面	カニがカキの種をうめて、水をまく	
第一場面	カニとサルがおにぎりをとりかえる	

物語の学習に取り組ませた。それぞれの場面の絵の説明と指導の流れについて前ページの表に示している。この絵本づくりを通した物語の学習を計6時間扱いとした。

これらの絵の右側に下図のような表記欄を設け、書写活動を取り入れられるようにした。これは物語の要素（登場人物、あら筋等）の理解をさらに定着させることをねらったものである。単文を書ける段階の児童⑦、⑧、⑪、⑫には縦11、横6のマス目とし、



単語（清音）をゆっくり書けるようになった段階の児童⑤、⑥、⑨、⑩には縦7、横4のマス目を用意した。

使用した絵に関して共通して言えることは、一枚の絵に二～三の内容が含まれているという点である。第一場面の絵について言えば、①カニとサルとがそれぞれオニギリとカキの種とを見つけ、②それらをお互いに交換する、という二つの内容が含まれている。こうしたあら筋を一枚の絵で児童に理解させることはむずかしいと予想したので、この絵本づくりと平行させてペープサートや身体表現を取り入れた指導も位置づけた。一単位時間の学習過程を右上図のように計画して指導に入った。

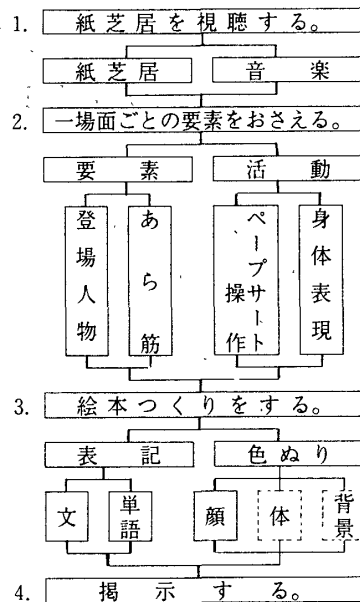
### (3) 児童の実態と課題

本学級児童の物語の理解と表現に関する実態と課題は次の表の通りである。課題については、舞台上の演技に関連させて記述した。

児童	実 態	課 題
男児⑤	おおまかな全体の流れと場面場面に関連づけて理解できる。表情豊かに表現することができる。	一人二役、あるいは主役として、豊かな表現ができるようになる。
男児⑥	ひとつひとつの場面および全体のストーリーの理解ができ、表情豊かに表現することができる。	一人二役、あるいは主役として、豊かな表現ができるようになる。
女児⑦	ひとつひとつの場面および全体のあら筋の理解がよくできる。時間的経過を絵と単文で表現できる。	内容についてよく理解できているので、それに基づき豊かに表現できる。
女児⑧	ひとつひとつの場面および全体のあら筋の理解がよくできる。時間的経過を絵と文章で表現できる。	他児にうまくかわかり、身体表現に合わせて言語表現ができる。
女児⑨	物語の理解は困難だが、登場人物の姿や特徴的な動作については再現できることがある。	友人の援助のもとで劇中の踊りなどに参加し、身体表現ができる。
男児⑩	印象的な内容を断片的に理解している。言語表現は困難だが、気分が乗ると大まかな演技ができる。	友人の援助のもとで自分の役の大まかな演技ができる。
男児⑪	注意の集中、持続ができにくく、印象的な部分を理解している。人前での発表を恥ずかしがる。	友人の演技に合わせて自分の役の大まかな演技ができるようになる。
女児⑫	ひとつひとつの場面、および全体のストーリーの理解ができる。人前での発表を恥ずかしがる。	全体の流れを理解して、みんなの前で表現できるようになる。

### (4) 「さるかにがっせん」を指導するにあたって設定した仮説

○ページで述べた基本的仮説をふまえ、本学級の児童の実態に合わせた仮説を次のように仮定



した。

仮説①……入学以来数回の演技発表をクリスマス会で体験してきた本学級児童にとって、親や友人の前での演技発表という目標は劇づくりの学習全般を意欲づけるであろう。

仮説②……物語の学習における一単位時間の学習過程の中に身体表現活動を導入することで（前ページの図参照）、言語による意思の表現が比較的困難な児童（児⑨、⑩、⑪、⑫）も意欲的に学習に取り組み続け、物語の理解が促進されるであろう。このことは場面や情景に応じた表現につながるであろう。

仮説③……劇化の学習の段階で周囲の児童とかわり合う必要のある演技を取り入れることで、学習後の友人たちとの関わりにも良い効果が波及するであろう。

### 3 物語の学習

〈第1時（第一場面の学習）、第2時（第二・三場面の学習）〉

劇づくりの学習への態勢づくりとして、学習の開始時にテレビアニメ「まんが日本昔ばなし」のテーマソングを流すことにした。児童はこの曲をととても喜び、声を合わせて歌うことで学習への態勢づくりが自然とできていった。

まず紙芝居の視聴から学習に入ったが、183ページの図に示した木製の枠（黒色）を使用すると、児童が紙芝居の絵を比較的集中して視聴するようになり、効果的であった。

学習過程の後半に絵本づくりを位置づけてみたが（前ページの構造図参照）、そこでの表現についての個別の課題は右の表の通りである。児⑤、

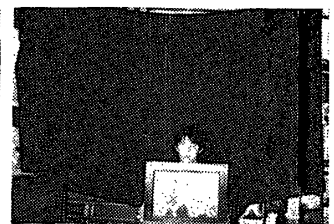
⑨	⑤⑥⑩	⑪	⑦⑧⑫	児童
ひらかななぞり書き	単語のなぞり書き	文の視写（模範文は同じ紙面にある）	文章の視写（模範文は黒板にある）	課題



⑥、⑩の課題としたなぞり書きは、太目の水性ペンで書かれた字の上を鉛筆でなぞるという内容にした。このようにして記入したり色をぬった絵本プリントを掲示できるパネルを教室に用意したところ（写真右上）、児童は次時の絵本プリントを楽しみに待つようになった。

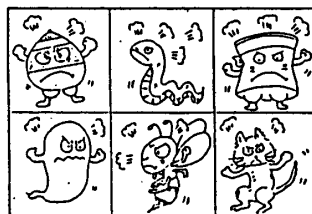
〈第3時（第四場面の学習）〉

指導者背後の黒板を黒い幕で覆ったところ、そうでない状態よりも児童は紙芝居を集中して視聴できるようになった（写真右）。普段は注意が散漫になりがちな男児⑩の視聴態度に良い効果がみられた。室内の環境づくりも視聴態度に少なからぬ影響を与え、学習意欲を高めるためのポイントのひとつになるといえる。



〈第4時（第五場面の学習）〉

第五場面からハチ、クリ、ウスの三人が初めて登場する。そこで右図のプリントを与え、正しい登場人物だけを選択して切りとり、絵本プリントに貼るといった課題を与えた。女児⑦、男児⑩が誤った選択をしたので、この二人には紙芝居の絵を参考にさせた。切る、貼るという操作活動のおもしろさと、絵で正誤を判断するというおもしろさで、8名の児



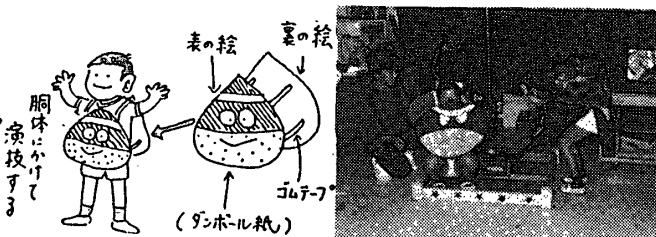
童はこの学習に積極的に取り組み、楽しい雰囲気の中で登場人物を再現することかできた。

第1時から第4時までは紙芝居の視聴と絵本プリントへの記入という学習内容が多かった。そこで第5時からは次の点に留意して指導にあたることにした。

- ・ 女児⑨, 男児⑩は言語面よりも主に身体運動面での表現が得意である。そこでこれからの学習に身体表現活動を取り入れ、学習に意欲的に取り組ませる。
- ・ 物語の理解が比較的良好でできる女児⑦, 女児⑧はこれまでの学習であら筋をほぼ理解できたため、これからは理解を実際の表現(演技)につなげていく段階に入る。そのためにも身体表現活動を充分に取り入れていく。

《第5時(第六場面の学習), 第6時(第七・八場面の学習)》

第六場面はクリがはじめてとぶという内容である。「さるかにがっせん」のあら筋はこのあたりの場面から登場人物たちのダイナミックな動きで特色づけられる。児童がこうした動きを身体表現できるようにするために、右図のような衣装をダンボール紙で製作してみた。「かくれる」「はじめてとびあがる」などのダイナミックな動きが可能になるよう、



手足を出して自由に動けるように工夫した。こうした衣装を登場人物全員に用意したところ、演技への意欲づけに大きな効果があった。着がえが簡単にできるため、練習中での配役の交代も時間がかからず、児童を待たせたり飽きさせたりすることがなかった。日頃、気にいらぬことがあるとカンシャク気味になることの多い女児⑧も、自分の番がくるまでの短い時間を待つことができるようになった。また、日頃発語が少なく、引っ込み思案な面のある男児⑩も衣装をつけることで生き生きとした笑顔で演技でき始めた。

第七・八場面はサルがハチ, クリ, ウスにこらしめられるという内容である。教室に簡単なしつらえのいろりを用意し(写真右上), 指導者がまず演技の見本を示した。そのあと, 場面を区切って児童に演技させてみた。和やかな雰囲気の中かで指導者の演技を視聴したことが児童の劇理解を促し, あら筋に沿って各児童が表情豊かに演技できるようになった。

《第7時(製本)》

第一場面から第八場面までのプリント計8枚を綴じて1冊の絵本にした。表紙をつけて大型ホッチキスで綴じさせた。製本テープをとりつけると丈夫な絵本となり, 児童はこの絵本を大切に家にもちかえった。

4 劇化の学習

《第8時(配役の確認)》

配役については児童の希望を優先したが, 二名以上の児童の希望が重なった場合には二人でひと役を演じる(劇の途中で役を交代する)などの方法を取り, 8名の児童全員が自分の役を納得してから劇化の学習を開始した。8名の児童の配役を右表に示している。

役	サル	カニ	ハチ	クリ	ウス
第一幕	女児⑫	男児⑥ 女児⑨	女児⑦	男児⑩ 男児⑪	男児⑤
第二幕	男児⑤	〃	女児⑦ 女児⑧	〃	女児⑫

第一幕は, カニがケガをする場面まで。第二幕はハチ, クリ, ウスたちがサルの家に向かう場面からの開始である。

《第9時, 第10時(教室と会場舞台での演技練習)》

「さるかにがっせん」の劇では登場人物の演技もさることながら, 児童の演技を助け, ひき立



見ている前で演技することへの期待感も、演技練習への取り組みをより積極的にしていった。このことは、児童の日記や保護者からの通信によく表われていた。帰宅してからも自分の役や友人の役を演じて親に得意そうに見せたという児童もいて、この劇づくりに児童が意欲的に取り組んでくれていることをうれしく思った次第である。

## 5 演技発表（当日）の様子

劇は観る側と演じる側とで創り上げるものである。児童の演技に対して観客から大きな拍手などがあれば児童はさらに表現意欲を高めていく。表現力の育成にとって大切な必要条件のひとつにこの表現意欲の育成があると考え。本学級の演技発表では学級児童8名のそれぞれの演技に対して保護者、友人、教師からの暖かい拍手が劇中で何度もあり、児童はそのあとも意欲的に演技を続けることができた。この意味で有意義な演技発表であったと考える。この日の保護者からの意見にも、この劇で児童が生き生きと演技できていたことを喜んでいるといった内容が多かった。ひとりひとりの演技についての詳細をここで述べる余裕がないが、多くの観客を前にして日頃の練習の成果を8名の児童が物おじせずに生き生きと出せたことを大変うれしく思った。

## 6 考察

### (1) 仮説①について

劇は相手役の友人や観客の存在を意識したところに生まれるといえるが、本学級の児童は当日に親が観賞してくれることを励みに練習を続けていた。その意味でこのクリスマス会での演技発表ならびにクリスマスにちなんだ催しを大変楽しみにしていた。また、約2週間余りの単元期間であったが、児童の多くは学習意欲を持続させて活動に取り組むことができた。発表という大きな目標が児童の学習意欲の喚起とその持続に促進的な効果を及ぼしたと考える。

### (2) 仮説②について

児童ひとりひとりの実態に応じて身体表現の内容をそれぞれに用意し、どの児童も劇中で必ず一回は活躍の場（いわゆる「見せ場」）を持てるようにした。たとえば女児⑫（ウスの役）には、演技用テープに録音されている「ドスン」という効果音に合わせて、高さ30cmの段からとびおりてサルを下じきにするという活動を用意して指導にあたった。このように、適度な高さから「とびおりる」という具体的な演技内容を用意し、演技のタイミングを児童が正しくつかめるように明瞭な効果音なども用意しておいたことで、女児⑫は自分の演技について苦手意識をもつことなく、落ちついて意欲的に取り組めるようになった。また男児⑩には演技用テープの中の自分の声を演技のタイミングの基準とすることで「歩く」「しゃがむ（かくれる）」などの演技を援助なしでできるようになった。練習の段階では指導者からの言葉がけを必要としていたが、演技用テープの内容のみを基準とした演技が可能になったことは本児の進歩のひとつであった。このように、演技の手がかりになるものとして演技用テープを使用したことが演技のタイミングを把握しやすくさせ、また児童が理解しやすく覚えやすい具体的な演技動作を用意したことが児童の生き生きとした演技を促すのに効果的であった。こうしたことが基盤となって児童は意欲的に劇づくりの学習に取り組み続けることができたと考え。

### (3) 仮説③について

演技用テープについては、ダビング録音をして希望の家庭に配布した。毎日のようにこのテープを家庭で聞き、友人のセリフまでほぼ暗記した児童も現れている。このように演技用テープが児童に大変人気がある。現在でも休憩時間等に聞かせると、児童は喜んで何度も演技をくり返す。このような場では、必然的に友人とかかわり合うことになり、お互いが参加する遊びとして発展してきている。こうした場づくりに目を向け、継続発展させることが今後の課題である。